

中島敦 33年の短い生涯

1909年に東京都四谷区で誕生した中島敦は、幼少期に久喜市で約5年間を過ごしました。作品「光と風と夢」が芥川賞候補に挙がり、選考委員の川端康成や室生犀星から好評を得ましたが、その作家人生は短く、持病の喘息により、1942年12月4日に33歳という若さでこの世を去りました。敦の代表作である「山月記」は、1942年2月に文芸雑誌『文壇』に発表され、この作品で敦は文壇にデビュー。敦の死後、1951年に高校の国語の教科書に初めて採用されて以来、国民教材とも呼ばれるまで親しまれ、現代まで読み継がれています。

幼少期を過ごした久喜

両親が事実上の離婚状態となり、1911年から1915年頃までの間、敦は埼玉県久喜町（現久喜市）にあつた父の実家に預けられ、両親不在のもと、祖母・きくや伯母・ふみなどの手で育てられました。この久喜新町の家は、祖父・撫山が漢学・国学を教えた学舎を久喜本町から移築・新築したばかりのものでした。

敦がこの頃に描いた絵が残されており、たどたどしい手つきながら漢字で自分の名前を書いたものや、身近なおじを描いたらしい、ひげを生やした人物の絵などが確認されています。



其の昔 中島敦

1909~1942

写真提供：県立神奈川近代文学館

# 久喜地域近代化の礎を築く 中島家の軌跡

「山月記」や「李陵」といった作品を世に送り出した作家・中島敦。また敦の祖父・中島撫山は、漢学や国学を地域住民に教え、数多くの要人を輩出しました。実は中島家の人々は、久喜市にさまざまなゆかりがあります。令和4年は、敦の没後80年にあたります。今月は、郷土資料館で開催している特別展の内容と連動しながら、敦と中島家の人々についてご紹介します。

「人生は何事をも為さぬには余りに長い、何事かを為すには余りに短い」

これは「山月記」に出てくる一文です。皆さんも、一度は耳にしたことがあるかもしれません。また、学生時代に国語の教科書で「山月記」を読んだという方も多いのではないのでしょうか。

「山月記」は、中国を舞台にした作品で、漢語を駆使した独特の格調で書かれています。詩人になるという夢が叶わずに虎になってしまった主人公・李徴が、その運命を友人に語るというものです。李徴は元々エリート官僚で自尊心の強い男でした。詩人を志すも失敗し、再び官僚に出戻りましたが、屈辱のあまり発狂し、森の中に姿を消します。自尊心と羞恥心が膨れ上がった結果、理性の制御が利かない虎になってしまうのです。自己実現と自意識の葛藤に苦悩する人間の内面を、鋭く、象徴的に表現した作品です。

中島敦デビュー作品 「山月記」



## 第12回 特別展 敦 中島家の系譜 — 中島敦没後80年 —

敦の没後80年にあたり、郷土資料館では作家・中島敦にスポットを当て、祖父・撫山や中島家の人々の系譜を振り返るとともに、中島敦と久喜との関係や作家としての業績について紹介します。



10/8(土) → 12/4(日)

10時~18時 | 入場無料 |

郷土資料館 展示室2 (久喜市鷲宮5-33-1)

問合せ：郷土資料館 ☎57-1200

interview

会を設立したきっかけは…

私の父が漢学者だったこともあり、私も大学では国文学科を専攻していました。中島敦のことはもちろん知っていましたが、市内に住んでいて、中島敦という作家は知っていても、久喜にゆかりがあるということは知らない人が多いですね。

やっぱり、ふるさとを好きになる気持ちは、そこに愛する人がいるかどうか。つまりは郷土の偉人がいるかどうかだと思えます。「おらが町にはこういう人がいた」と知っていると、誇りになりますよね。

それでこの会で、市内の新中学1年生の子たちにパンフレットを配ったり、駅前に看板を建てたりといった活動を行うようになりました。

敦の作品について…

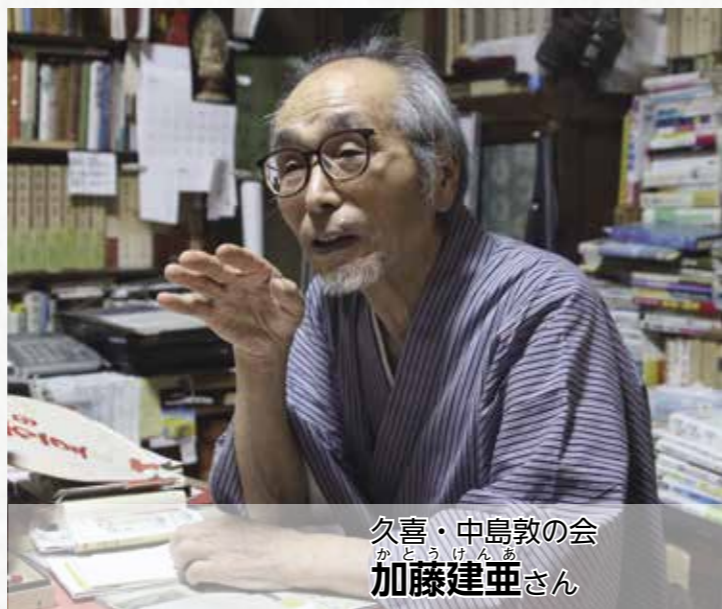
敦の作品の特徴は、男文学と漢語交じりの特殊な文体。森鷗外の再来といわれますが、あの文章は彼にしか書けないんじゃないかな。よっぽど漢学の素養がないと真似できないと思います。彼がこれだけの文章を書けたのは、漢学が身近にある環境で育って、自然と身に付いていたからでしょうね。

実は敦はモテモテだった？

敦の人生の中で、一番印象深いのは

今後の展望は…

現在の活動をこのまま元気に続けていくことですね。まずはそこが一番です。そして、やっぱり地元をもっと見てほしい。敦だけでなく、掘り返せば隠れた偉人がもつといるんじゃないかと思うんです。それを多くの人に知ってほしいと思っています。



久喜・中島敦の会 加藤建亜さん

もっと多くの人に 敦の想いを伝えたい